OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（3）
Author(s)	竹田，新
Citation	大阪外国語大学論集．1992，7，p．209-232
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（３）

竹　田　　新

Ⅴ　（第四章の翻訳）

第４章‘［アッラーの］友’アブラハム――彼の上に平安あらんことを――と彼の時代に続くイスラエルの子ら（Banū Isrā'īl）他の諸預言者・諸王の物語(1)

（§76）アブラハムは成長し、隠れていた洞窟から出てきて、世界全体やその中にある創造の証とその影響を熟考した時、金星とその輝きを眺めて、「“これぞ我が主である”」と言った。(2)また、太陰が金星より輝いているのを見た時、「“これぞ我が主である”」と言った。(3)更に、太陽の光が彼の見たものの中で最もきらきらしているのを見た時、「“これぞ我が主である”」と言った。(4)“これぞ我が主である”というアブラハムの言葉をめぐって［後の］人々は論争し、この言葉が推察と問いかけによって彼から出たものだと考えた者もいれば、彼が成人に達して、責任のある状態になる以前に出たものだと考えた者、それ以外の意見の者もいる。ガブリエルがアブラハムのところにやって来て、彼に宗教を教え、アッラーはアブラハムを預言者、友人に選び給うた。(5)アブラハムは“以前に方正な行い（rushd）を”授けられており、方正な行いを授けられた者は、誤りや堕落や、永遠なる唯一のお方以外を崇拝することから守られていた。(6)アブラハムは彼の民が彫像類を自分たちの神々として崇めるのを見て、彼らを非難した。(7)彼らの神々に対するアブラハムの非難が彼らに幾度も繰り返され、この非難が彼らの間に広がった時、ニムロドが彼に火を用意し、彼を火の中に投げ込んだ。(8)するとアッラーはアブラハムに対してその火を“冷たく安全なものに”し給い、火がその日、地上の全ての場所で消えた。(9)

（§77）アブラハムにイシュマエル――両人の上に平安あらんことを――が生まれたが、それはアブラハムが86歳になってからである。(10)90歳とも言われている。イシュマエルはハガル（Hājar）から生まれたのであるが、彼女はサラ（Sārah）の女奴隷であった。(11)サラはアブラハムを信じた最初の者であり、ナホルの子ベトエル（Batū'īl）の娘で、アブラハムの父方のおじの娘に当たる。(12)後で述べるように他の説もある。

（§78）ロト（Lūṭ）はアブラハムを信じた。ロトはナホルの子テラの子ハラン（Hārān）の子で、アブラハムの兄弟の子に当たる。(13)アッラーはロトをかの５都市に遣わし給うた。(14)５都市とは、ソドム（Sadūm）、ゴモラ（Ghumūrā）、アドマ（Admūtā）、ツォアル（Ṣāghūrā）、

ツェボイム（Ṣābūrā）である。ロトの民は‘ムウタフィカ’（al-Mu'tafikah）の住民である。ムウタフィカは、語源を研究する者の意見によれば、虚偽を意味するイフク（ifk）という語から派生した語である。(15)アッラーはそのことを、御啓典の中に“ムウタフィカを全滅させた”という御言葉で述べ給うた。(16)この地は、シリア辺境とヒジャーズ辺境との間で、ヨルダン（al-Urdunn）とパレスティナ（Filasṭīn）の近くにあるが、シリアの領域に含まれる。(17)そして今日、即ち332年まで残る、人影のない廃墟で、そこには、‘目印の付いた’石があり、旅人はその石が黒く輝いているのを見る。(18)ロトは20数年間、彼らの間に留まり、彼らにアッラーへの信仰を説いたが、彼らは信じなかったので、彼らの上に懲罰が下った。(19)それは、アッラーが彼らについて語り、述べ給うた通りである。(20)

（§79）イシュマエルがアブラハムにハガルから生まれた時、サラは嫉妬した。(21)そこで、アブラハムはイシュマエルとハガルをメッカへ連れて行き、そこに二人を住まわせた。(22)アッラー——かれに対する称讃はこの上なし——はそのことを、“我らが主よ、我は子孫の或る者をあなたの聖なる館の傍らの耕せない谷間に住まわせました”云々というアブラハムの言葉を通して告げ給うた。(23)アッラーは彼の祈りに答え、彼らの孤独をジュルフム人とアマレク人によって取り去り、“人々の心が彼らに傾くように”計らい給うた。(24)そして、アッラーはアブラハム——彼の上に平安あらんことを——の時代、ロトの民が行なったよく知られている事柄のために、彼らを滅ぼし給うた。

（§80）その後、アッラーはアブラハムに息子を犠牲にするよう命じ給うた。(25)アブラハムはすぐさま主に従い、“息子を［地面に］額を伏せるようにして倒した”。(26)アッラーは“大きな犠牲で”アブラハムを贖い給うた。(27)“アブラハムはイシュマエルと共に、その館の礎を”打ち立てた。(28)その後、アブラハムにサラからイサク（Isḥāq）が生まれた。それはアブラハムが120歳になってからであった。(29)犠牲にされたものをめぐって［後の］人々は論争し、それがイサクだという意見を持った者もいれば、イシュマエルと考えた者もいる。(30)もし犠牲の命令がミナーで下ったのであれば、犠牲にされたのはイシュマエルである。(31)なぜなら、イサクはヒジャーズに入ったことがないからである。そして、犠牲の命令がシリアで下ったのなら、犠牲にされたのはイサクとなる。なぜなら、イシュマエルはシリアから連れ去られた後はそこに入ったことがないからである。サラは死去し、アブラハムはその後、ケトラ（Qīṭūrā）と結婚した。彼にはケトラから6名の男子が生まれた。(32)ジムラン（Zimran）、ヨクシャン（Yaqsan）、メダン（Madan）、ミディアン（Madyan）、イシュバク（Yasbāq）、シュア（Suwaḥ）である。アブラハムはシリアで死去し、彼の年齢はアッラーに召されるまで175歳であった。(33)彼の上には10葉の聖冊（ṣaḥīfah/ṣuḥuf）が下された。(34)

（§81）イサクはアブラハムの死後、ベトエルの娘リベカ（Rafaqā）と結婚し、彼には一度にエサウ（al-'Īṣ）とヤコブ（Ya'qūb）が生まれた。(35)始めにこの世に出たのはエサウで、次いでヤコブであった。(36)イサクは両名が生まれた時、60歳であった。(37)イサクは視力がなくなり、

ヤコブが兄弟たちの長たることと、ヤコブの子孫が預言者たることをヤコブのために祈り、エサウのために、エサウの子孫が王たることを祈った。(38)イサクの年齢はアッラーに召されるまで185歳で、彼は父‘［アッラーの］友’と共に埋められた。(39)彼らの墓の場所はよく知られ、エルサレム（バイトル・マクディス Bayt al-Maqdis）から18マイル離れた、‘アブラハムのモスクと牧草地’の名で知られるモスクにある。(40)

（§82）イサクは息子のヤコブにシリアの地へ行くよう命じ、ヤコブと彼の子供12名が預言者たることを知らせていた。(41)その12名は、ルベン（Rūbīn）、シメオン（Shim‘ūn）、レビ（Lāwī）、ユダ（Yahūdā）、イサカル（Yashsakhar）、ゼブルン（Zabulūn）、ヨセフ（Yūsuf）、ベニヤミン（Binyāmīn）、ダン（Dhān）、ナフタリ（Niftāl(ī)）、ガド（Qādh）、アシェル（Ashar）で、これらが12支族に当たる。(42)そして預言力と王権は、そのうちレビ、ユダ、ヨセフ、ベニヤミンという４名の子孫のもとにある。ヤコブは兄弟のエサウを大いに恐れたが、アッラーはヤコブを護り給うた。ヤコブには羊が5500匹いたが、彼はエサウにその10分の１を与えた。(43)それはアッラーが彼をエサウへの恐れから護り給い、エサウには彼を襲う術もなかったのに、彼がエサウの襲撃を恐れ、エサウの悪行を避けようとしてのことであった。(44)そこで、アッラーはヤコブの約束違反に対して、制裁を加え、彼の子孫に懲罰を与え給うた。(45)ヤコブに、「お前は我が言を信頼しなかった。それゆえ、エサウの子孫にお前の子孫を550年間支配させよう」と啓示し給うたのである。(46)この期間はローマ（ar-Rūm）がエルサレムを破壊し、イスラエルの子らを奴隷にして以来、ウマル・ブン・アル＝ハッターブ（‘Umar b. al-Khaṭṭāb）――アッラーが彼に満足し給わんことを――がエルサレムを開城するまでに当たった。(47)

（§83）ヤコブが最も愛した子供はヨセフであった。(48)ヨセフの兄弟たちはそのことで彼を妬み、彼と兄弟たちの間には、アッラーが御啓典の中で語り、かれの預言者（＝ムハンマド）の口を通して告げ給うた事が起った。それはこの預言者の民のもとではよく知られていた。アッラーはヤコブが140歳の時、エジプト（Miṣr）の地で彼を召し給うた。(49)そこでヨセフは彼を運び、パレスティナの地の、アブラハムとイサク――両人の上に平安あらんことを――の墓のところに彼を埋めた。(50)アッラーはヨセフ――彼の上に平安あらんことを――が110歳の時、エジプトで彼を召し給い、彼は大理石造りの、鉛で継ぎ合わされ、水や空気を通さないニスを塗られた柩の中に安置され、メンフィス（Manf）の町の近くで、エジプトのナイル（[an-]Nīl）に投げ込まれた。(51)それゆえ、かの町には彼のモスクがある。また、ヨセフは自分をアブラハムのモスクにある父ヤコブの墓に運んで、埋めるように遺言したとも言われている。(52)

（§84）その時代にヨブ（Ayyūb）――彼の上に平安あらんことを――がいた。(53)彼はアブラハムの子イサクの子エサウの子レウエル（Ra‘wīl）の子ゼラ（Zāraḥ）の子アモス（Amūṣ）の子で、シリアの地の、ダマスクスとジャービヤ（al-Jābiyah）の間にある、ヨルダンのハウラン（Ḥawrān）とバタネヤ（al-Bathanīyah）の地に住んでいた。(54)彼は富も子供たちも多かったが、アッラーは彼を試すべく、本人と富と子供たちに対する試練を課し給うた。(55)彼は耐え忍び、

アッラーは彼にその全てを戻し、彼の過ちを取り消し給うた。アッラーは御啓典の中でかれの預言者——アッラーが彼を祝福し、守り給わんことを——のロを通してその話を語り給うた。(56)ヨブのモスクと彼が沐浴した泉は、今日、即ち332年、ヨルダンの地の、ダマスクスとティベリアス（Ṭabarīyah）の間にある、ナワー（Nawâ）とゴラン（al-Jawlân）の地においてよく知られている。(57)このモスクと泉はナワーの町から3マイル程の所にあり、試練の間、彼と妻のラフマー（Raḥmâ）が避難していた石は今日までそのモスクにある。(58)

（§85）トーラーや最初の諸啓典を信じる人々が述べたところでは、ヤコブの子ヨセフの子マナセ（Manashshâ）の子モーセ（Mūsâ）はアムラム（'Imrân）の子モーセより前の預言者であり、ノアの子セムの子アルパクシャドの子シェラの子エベルの子ペレグの子マルカーン（Malkân）の子ヒドル（al-Khiḍr）を探し求めた人物である。(59)啓典の民の中には、ヒドルはアブラハムの子イサクの子エサウの子エリファズ（Alīfaz）の子オマル（'Amâ' îl）の子ヒドルーン（Khiḍrūn）であり、自分の民のもとに遣わされ、彼らに受け入れられたと述べた者たちもいる。(60)ヤコブの子レビの子ケハト（Qâhat）の子アムラムの子モーセは、巨人のファラオ（fir 'awn）の時代にエジプトにいた。この人物はエジプトの4代目のファラオに当たり、長寿で、身体が大きく、イムラーク（'Imlâq）の子アムル（'Amr）の子ハラン（Hârân）の子ライス（Layth）の子アブー・ル＝ヒルワース（Abū al-Hilwâs）の子アブー・ヌマイル（Abū Numayr）の子ムアーウィヤ（Mu 'âwiyah）の子ムスアブ（Muṣ 'ab）の子ワリード（al-Walīd）といった。(61)

（§86）イスラエルの子らはヨセフ——彼の上に平安あらんことを——の死後、奴隷にされ、厳しい試練にさらされた。(62)占い師や占星術師や魔術師たちは、一人の子供が生まれ、その子供がファラオの王権を無に帰し、エジプトの地に大事を起こすだろうと、ファラオに告げた。ファラオはそのことを心配し、乳飲み子たちを殺すよう命じた。モーセの事と、彼を大河に投げ込むよう母親にアッラーが啓示し給うた事に関しては、アッラーが語り、かれの預言者、ムハンマド——彼の上に平安あらんことを——のロを通して明らかにし給うた事が起った。(63)その時代、預言者シュアイブ（Shu 'ayb）——彼の上に平安あらんことを——がいた。彼はアブラハムの子ミディアンの子エファ（'Îfâ）の子ムッル（Murr）の子ラアワーイール（Ra 'wâ'îl）の子ナウィール（Nawîl）の子シュアイブである。(64)彼の言葉はアラビア（'Arabî）語で、ミディアンの住民のもとに遣わされていた。(65)モーセはファラオから逃れ出た時、預言者シュアイブ——彼の上に平安あらんことを——のそばを通りかかった。(66)モーセとシュアイブの事、及びモーセとシュアイブの娘との結婚に関しては、アッラー——至高至大におわす——が述べ給うた事が起こった。(67)

（§87）“アッラーはモーセに親しく語りかけ”、彼を兄弟のアロン（Hārūn）によって補強し、二人をファラオのもとに遣わし給うた。(68)ところが、ファラオが二人に逆らったので、アッラーはファラオを溺れさせ、モーセにイスラエルの子らを引き連れて、かの荒れ野（at-tīh）へ

出て行くよう命じ給うた。[69]彼らの数は、まだ成年に達していない者を別にして、大人60万名であった。[70]アッラーがかれの預言者モーセにシナイ山（Ṭūr Sīnā）の頂で下し給うた幾枚かの板は、エメラルドからできており、黄金で文字が書かれていた。[71]モーセは山から降りた時、イスラエルの子らの一部が仔牛の崇拝に没頭しているのを目にした。[72]彼は震え、それらの板が彼の手から落ち、砕けてしまった。[73]彼は板の断片を集め、それらを他の物と共に御姿（sakīnah）の聖櫃に収め、幕屋（haykal）に安置した。[74]アロンは祭司で、幕屋の管理人であった。[75]アッラーはアムラムの子モーセが荒れ野にあった時、彼の上にトーラーを下し終え給うた。アッラーはアロンを召し給い、彼はサラート（as-Sarât）の山々に近く、シナイ山に隣合う、モアブ（Mu'āb）の山に葬られた。[76]彼の墓はよく知られ、古い洞窟にあり、そこからは魂を持った者なら誰でも不安になるような大きな音が夜に聞こえることがある。アロンは埋葬されているのではなくて、その洞窟の中に安置されているとも言われている。この場所には珍しい話があり、そこを訪れた者は我らが記述した事柄を知っている。[77]

（§88）これ（＝アロンの死去）は、モーセの死去の7か月前のことであった。[78]アロンは123歳の時に召されたが、120歳の時に召されたとも言われている。[79]また、モーセはアロンの死去の3年後に召されたとか、モーセはシリアへ出向き、内陸からアマレク人、クルバーン人（al-Qurbânîyūn）、ミディアン人（al-Madyanîyūn）や、トーラーで述べられた、その他の人々のもとへ差し向けられていた分遣隊を率いて、当地で幾度か戦ったとも言われている。[80]アッラー——いと高くおわす——はモーセ——彼の上に平安あらんことを——の上に10聖冊を下し給い、100聖冊が完成した。[81]その後、アッラーは彼の上にヘブライ語（al-'Ibrânîyah）でトーラーを下し給うた。トーラーは、命令、禁止、許可、不許可、慣行、規範を含み、5書（sifr/asfâr）である。この書とは聖冊のことである。モーセ——彼の上に平安あらんことを——は御姿が入る聖櫃を600750ミスカール（mithqâl）の黄金で作っていた。[82]管理人はアロンの後、ヨセフ支族のヌン（Nūn）の子ヨシュア（Yūsha'）となった。[83]

（§89）モーセ——彼の上に平安あらんことを——は120歳の時に召された。[84]モーセもアロンも、全く老いることがなく、その若々しい特徴は変わることがなかった。[85]アッラーがモーセを召し給うた時、ヌンの子ヨシュアがイスラエルの子らを連れてシリアの地へ急ぐことになった。[86]当地は巨人であるアマレク人の王たちやその他のシリアの王たちが征圧してしまっていた。そこでヨシュアは彼らのもとに分遣隊を差し向け、幾度か戦い、ガウル（al-Ghawr）の地のエリコ（Arīḥā）とゾガル（Zughar）とを征服した。[87]当地は'悪臭を放つ湖'の地であり、この湖は溺れる者を受け入れず、魚など生物が生まれ出ない。[88]この湖のことは論理学の著者や、彼の時代の前後の哲学者たちも述べている。[89]ティベリアス湖の水、即ちヨルダン川の水は、この湖に終わる。ティベリアス湖の水はダマスクスの地にあるカファルラー（Kafarlā）とカルウーン（al-Qar'ûn）の湖から流れ始める。[90]ヨルダン川の水流は'悪臭を放つ湖'に達すると、この湖に入り込み、湖の水と混わらずに、湖の中央部に達し、そこで下にもぐりこむ。これは大き

な川だが、湖の水位を増減させることもなく、どこまでもぐりこんでいるのかは知られていない。

（§90）この湖、即ち‘悪臭を放つ湖’には、『時代の情報』と『中間の書』の中で我々が言及した長い話と物語がある。(91)我々はこの湖から取り出され、ユダヤ石として知られる、西瓜の姿をした二つの形を持つ石の話を述べた。哲学者たちもその石のことを述べ、医師たちは膀胱に結石の痛みを持った者にその石を用いた。石には雄雌の2種類あり、雄石は男用、雌石は女用である。この湖からは土瀝青として知られる薬物が取り出される。(92)この世には、アッラーがよりご存じでおわすが、魚など生物が生まれ出ない湖は、この湖と私がアゼルバイジャン（Âdharbayjân）の地で渡ったことのある湖以外にはない。その湖はウルミヤ（Urmiyah）とマラーガ（al-Marâghah）の間にあり、当地ではカブーザーン（Kabūdhân）で知られるものである。(93)先人たちは‘悪臭を放つ湖’に生物が生まれ出ない原因を述べたが、カブーザーン湖に言及しなかった。彼らの言から類推すれば、両湖の原因は同じであらねばならない。

（§91）マーリク（Mālik）の子フーバル（Hūbar）の子スマイダア（as-Sumayda‘）という、シリアの王がヌンの子ヨシュアに向かって進んだ。(94)その結果、両者は幾度か戦ったが、ヨシュアはその王を殺し、その全領土を所有するに至った。更にヨシュアはそれ以外の巨人たちやアマレク人の［王たちの］領土をも併合し、シリアの地を幾度か攻撃した。モーセの死後、イスラエルの子らをヌンの子ヨシュアが治めた期間は29年であったが、彼はアブラハムの子イサクの子ヤコブの子ヨセフの子エフライム（Ifrā’īm）の子ヌンの子ヨシュアである。(95)ヌンの子ヨシュアがアマレク人の王スマイダアと初めて戦ったのは、ミディアンの近くエイラト（Aylah）の地であったとも言われている。(96)それについて、アウフ・ブン・サアド・アッ＝ジュルフミー（‘Awf b. Sa‘d al-Jurhumī）が次のように歌う。(97)

フーバルの息子のかのアマレク人がエイラトで、その肉体をずたずたに引き裂かれていたのをあなたは見なかったか

鎧のない者と鎧を付けた者、合わせて80000名のユダヤ人軍団が彼に対して一丸となったのだ

この軍団は彼の死後、アマレク人に対する力となり、アマレク人は地上を恐る恐る歩き回るようになった(98)

あたかもアマレク人はメッカの山あいにいたことがなく、誰もかつてスマイダアを見たことがないかのようだ

（§92）シリアの地のバルカー（al-Balqā’）の村々の一つに、ハラン（Hârân）の子ロトの子モアブの子フィリスティム（Firistim）の子サムーン（Samūn）の子ベオル（Bā‘ūr）の子バラム（Bal‘am）と呼ばれる男がいた。(99)彼の祈りはアッラーに聞き入れられていたので、彼の民は彼にヌンの子ヨシュアを呪わせた。(100)しかし、それはうまく行かず、彼は失敗したので、アマレク人の王たちの一人に指示し、ヌンの子ヨシュアの軍隊に向かって美しい婦人たちを見せた。(101)すると、ヨシュアの軍隊はかの婦人たちの方へ急いだ。その結果、彼らの間に疫病が起こり、

90000名が滅んだ。(102)それより多いとも言われている。バラムは自分のところに御徴が来たのに、“それを脱ぎ捨てた”とアッラーが告げ給うた者である。(103)ヌンの子ヨシュアは110歳の時にアッラーに召されたと言われている。(104)

（§93）ヨシュアの後、イスラエルの子らの上にユダの子ペレツ（Bāraṣ）の子エフネ（Yūfannā）の子カレブ（Kālib）が立った。(105)ヨシュアとカレブとは“アッラーが恩寵を与え給うた”者たちである。(106)マスウーディーは言った。私は別の写本において、以下のことを見いだした。ヨシュアの死後、イスラエルの子らの長はクシャン・リシュアタイム（Kūshān al-Kufrī）で、彼らの間に8年間留まり、死んだ。(107)そして、ユダ支族に属するケナズ（Qānas）の子オトニエル（‘Uthnā'īl）が40年間支配し、モアブのバルカーの地にいた巨人クーシュ（Kūsh）を殺した。(108)しかし、その後イスラエルの子らが背信したので、アッラーはカナン（Kan‘ān）に20年間にわたって彼らを支配させ給うた。(109)彼が死ぬと、祭司アムラル（エリ？‘Amlāl）が40年間イスラエルの子らを率いた。(110)その後、サムエル（Shamwīl）が立った後、サウル（Ṭālūt）が彼らを支配したが、パレスティナの地のベルベル人（al-Barbar）の王、巨人ゴリアト（Jālūt）が彼らを襲った。(111)

（§94）マスウーディーは言った。我らが先に述べた最初の話に従うと、ヨシュアの後イスラエルの子らの長はエフネの子カレブであり、カレブの後の長で、彼らを30年間治めた者はアムロンの子アロンの子エルアザル（al-‘Āzar）の子ピネハス（Finaḥās）であった。(112)彼はモーセ――彼の上に平安あらんことを――の諸聖冊に心を向けていたので、それらを銅製の樽の中に置き、樽の蓋頭を鉛で覆った。そして聖殿（bayt al-maqdis）の岩のところに樽を持って来た。それは聖殿が建てられる前のことであった。すると、岩が割れて、洞窟が現れたが、その洞窟の中に第2の岩があった。彼が樽を第2の岩の上に置くと、第1の岩は元のように合わさった。(113)エルアザルの子ピネハスが死ぬと、メソポタミア（al-Jazīrah）の王、罪人クシャンがイスラエルの子らを治め、彼らを奴隷となし、彼らは8年間試練にさらされた。(114)

（§95）その後、カレブの兄弟で、ユダ支族に属するエフネの子オトニエルが40年間彼らを治め、その後は、モアブの王エグロン（‘Ajlūn）が18年間彼らを厳しい姿勢で治めた。(115)その後、エフライムの子孫の一人エフド（Ahūd）が55年間彼らを治めたが、彼の治世の35年目はこの世界の4000年目に当たる。(116)年代については他の説もある。その後、エフドの子シャムガル（Shāmghār）が彼らを25年間治めた後、シリア王、カナン人ヤビン（Yābīn al-Kan‘ānī）が20年間彼らを服従させた。(117)その後、デボラ（Dabūrā）と呼ばれる女性が彼らを40年間治めたが、彼女は彼の娘と言われており、ナフタリ支族に属するバラク（Bārāq）と呼ばれる男性と結婚した。(118)

（§96）その後、彼等をオレブ（‘Ūrīb）、ゼエブ（Zawīb）、バヌーリヤー（Banūriyā）、ダーリア（Dāri‘）、サルター（Saltā）という、ミディアン人の長たちが順次、7年3か月の間支配した。(119)その後はマナセ一族のギデオン（Jad‘ūn）が40年間イスラエルの子らを治め、ミディ

アン王たちを殺した。(120)その後は彼の子アビメレク（Abū Mālakh）が3年3か月、その後はエフライム一族のトラ（Tūla‘）が23年間治めた。(121)その後はマナセー族のヤイル（Yā’īr）が22年間、その後はアンモン人（‘Ammān）の王たちが18年間、その後はベツレヘム（Bayt Laḥm）のイブツァン（Bajshūn）が7年間、その後はサムソン（Shanshūn）が20年間、その後はアムラフ（Amlaḥ）が10年間、その後はアジュラーン（‘Ajrān）が8年間、それぞれ治めた。(122)その後、ペリシテ人（Filasṭīn）の王たちが40年間イスラエルの子らを服従させた後、祭司エリ（‘Īlān）が40年間治めた。(123)

（§97）彼の時代にバビロニア人（al-Bābilīyūn）がイスラエルの子らを征服し、聖櫃を略奪した。(124)イスラエルの子らはその聖櫃によって［アッラーの］御助けを求めていたのである。バビロニア人はそれをバビロン（Bābil）に運び、イスラエルの子らをその家々と子供たちから引き離した。そして、エゼキエル（Ḥizqīl）の民には以下のことが起こった。(125)彼らは“死を恐れて幾千人もが自分の家から出て行った者たちであり、アッラーは彼らに死ねと言い給い、その後、甦らせ給うた”。(126)疫病が彼らを襲っていたので、3支族が残り、それぞれ砂地、海上の島、高山に逃れた。(127)彼らには家々に戻るまで長い話があったが、戻ると、エゼキエルに「我々を襲ったようなものに襲われた民を見たことがあるか」と言った。彼は「いや、お前たちのようにアッラーから逃げた民を聞いたことがない」と言った。アッラーは7日後、疫病を彼らの上に蔓延させ給うたので、彼らは最後の一人まで死んでしまった。(128)

（§98）祭司エリの後、ナホルの子エロハム（Yarūḥān）の子サムエル（Ishmāwīl）がイスラエルの子らを治め、預言者と称し、彼らの間に20年間留まった。(129)アッラーは彼らから戦いを取り去り、彼らの事情を改善した。ところがその後、彼らは［善悪を］混ぜ、サムエルに「“我々に王を送れ。そうすれば、我々はアッラーの道のために戦おう”」と言った。(130)アッラーはサウル（Ṭālūt）、即ちアブラハムの子イサクの子ヤコブの子ベニヤミンの子ベラ（Fālakh）の子スマイダーフ（Sumaydāḥ）の子アフィア（Afyaḥ）の子ベコラト（Bakhūrath）の子ツェロル（Ṣarūr）のアビエル（Abyāl）の子キシュ（Qīs）の子サウル（Shāwil）を王にするよう命じ給い、彼をイスラエルの子らの王となし給うた。(131)これまでに、サウルほど彼らをまとめた者はいなかった。モーセがイスラエルの子らを引き連れてエジプトを脱出してから、サウルがイスラエルの子らの王となるまで、572年3か月であった。(132)

（§99）サウルは革をなめす職人であったが、イスラエルの子らの預言者サムエルが彼らに「“アッラーはお前たちにサウルを王として遣わし給うた”」と告げると、彼らはサウルに関してアッラー――至高至大におわす――が御啓典の中で告げ給うたように、「“我々の王となるなど、どうして彼にできようか。我々の方が彼より王となるにふさわしい。ろくな財産も授かっていないのに”云々」と言った。(133)彼らの預言者は彼らに「“彼が王であるという徴は、お前たちの主が下された御姿と［モーセの一族ならびにアロンの一族の］遺品とを収めた［天使たちが担う］かの聖櫃がお前たちのもとに現れることである”」と告げた。(134)かの聖櫃がバビロンに留まった

期間は10年であったが、彼らは夜明けに聖櫃を運ぶ天使たちの［羽ばたきの］かすかな音を聞いた。(135)

（§100）ゴリアトの権力が強くなり、彼の兵士と将校が増えた。彼はイスラエルの子らがサウルに従うことを聞くと、パレスティナからベルベル人の諸族を引き連れてサウルに向かって進んだ。(136)彼はペレツ（Fâris）の子ハッターン（Ḥaṭṭân）の子ディバール（Dibâl）の子マールード（Mâlûd）の子ゴリアトである。彼がイスラエルの子らの地にやって来ると、サムエルはサウルにイスラエルの子らを引き連れてゴリアトとの戦いに出て来るよう命じた。(137)アッラーはヨルダンとパレスティナとの間にある川でイスラエルの子らを試し、彼らに喉の渇きを課し給うた。(138)アッラーはそのことを御啓典の中で語り給うた。彼らは川からいかにして飲むかを命令されていたが、疑いを持つ者たちは犬のように川の水をなめたので、ゴリアトに最後の一人まで殺されてしまった。(139)その後、サウルがイスラエルの子らの精鋭から、ダビデ（Dâwud）の兄弟たちを含む313名の男を選ぶと、ダビデも兄弟たちについて行った。(140)両軍は衝突し、戦いは膠着状態となった。(141)サウルは人々を鼓舞して、ゴリアトに立ち向かう者に彼の財産の３分の１と彼の娘との結婚を約束した。(142)するとダビデが彼に立ち向かい、自分のかいば袋の中にあった石を投石器でゴリアトに投げ付けて、彼を殺した。(143)こうしてゴリアトは死んで倒れた。アッラーはそのことを御啓典の中で“ダビデはゴリアトを殺した”云々という御言葉で告げ給うた。(144)そして、ダビデのかいば袋の中にあった石は三つの石であったが、一緒にされ、一つの石になったと言われており、これらの石については、以前の我らの諸書の中で既に述べた話があり、これらの石こそゴリアトが殺されたものである。(145)

（§101）また、水をなめて、命ぜられたことに背いた者たちを殺したのはサウルである［とも言われている］。例の鎧、即ちイスラエルの子らの預言者が彼らに、それがぴたりと合う者だけがゴリアトを殺すと告げ、ダビデにぴたりと合った鎧の話と、これらの戦いで起こった事柄、泡立つ音を立てる川の話、サウルの支配の話、ベルベル人と彼らの系譜の始まりの話を、我らは我らの書『時代の情報』の中で述べた。(146)我らは後に、この書の適当な箇所でベルベル人と地上での彼らの分散に関する話の概要を述べる。

（§102）アッラーはダビデの名声を高め、サウルの名声を落としめ給うた。(147)サウルは以前の約束をダビデに果すことを拒んだが、人々の心がダビデに傾くのを見た時、娘をダビデと結婚させ、彼に税収の３分の１、権力の３分の１、人民の３分の１を引き渡した。その後、ダビデを妬み、彼を暗殺しようと欲したが、アッラーがそれを禁じ給うた。(148)ダビデはサウルと王権を争うことを拒んだが、ダビデの名声は高まった。サウルは王座の上で或る夜を過ごしたが、その夜、悲しみのために死んでしまい、イスラエルの子らはダビデに従うことになった。(149)サウルが王であった期間は20年であった。(150)ゴリアトが殺された場所はヨルダンのガウルの地のバイサーンであったとも言われている。(151)

（§103）アッラーはダビデのために鉄を柔らくなし給い、ダビデは鉄で鎧を作った。(152)また

アッラーは山々と鳥たちを彼に従わせ給い、両者は彼と共に［アッラーを］称えている。(153)ダビデはバルカーの地のモアブの住民と戦った。(154)また、彼の上には、詩編（az-Zabūr）がヘブライ語で150章にわたって下され、彼はそれを3分の1ずつにした。(155)3分の1はイスラエルの子らがネブカドネツァル（Bukht Naṣṣar）から被る事柄と将来ネブカドネツァルに関して起こるであろう事柄、3分の1はイスラエルの子らがアッシリア（Athūr）の住民から被る事柄、3分の1は訓戒、推奨、讃歌、畏怖で、詩編には命令、禁止、許可、不許可は含まれていない。(156)ダビデには万事が順調に進み、地上の端々にいる不信者たちからなる反逆者たちはダビデに恐れを抱いた。ダビデはエルサレム（Ūrshalīm）、即ちバイトル・マクディスに拝殿を建てた。(157)それは今日、即ち332年まで残る殿で、ダビデのミフラーブ（私室）として知られている。(158)エルサレムには今日、それより高い建造物はなく、その上からは本書で前述した‘悪臭を放つ湖’とヨルダン川とが見えるかも知れない。(159)

（§104）ダビデと2名の口論する者との件についてはアッラーが御啓典の中で語り給うた事が起こった。(160)ダビデが口論する者の一方に、他方の言い分を聞く前に言ったのは、“確かに彼はお前に不法を働いた”である。(161)ダビデの過ちをめぐって［後の］人々は論争し、我らが記した見方をとった者たちもいる。彼らは預言者たちから不服従な行為や意図的な不敬虔さを取り去った。なぜなら、預言者たちは罪がない人々で、ダビデの過ちは我らが記したことに過ぎないからで、その証明はアッラー——至高至大におわす——の御言葉“おお、ダビデよ、我らはお前を地上の代理者としてやった。よって、人々を真理に基づいて裁け”である。(162)また、そのこと（＝ダビデの過ち）は、ハイヤーン（Ḥayyān）の子ウリヤ（Ūriyā）と彼の殺害の物語に関して、創始の諸書や他の書の中で述べられたようなものであると考えた者たちもいる。(163)アッラーはダビデを40日後に赦し給うたが、その間、彼は断食し、泣いていたのである。(164)彼は100名の女性と結婚した。(165)ソロモン（Sulaymān）は成長し、並外れた資質を示し、父の裁定を助けた。(166)アッラーは“そしてそれぞれ（＝ダビデとソロモン）に判断力と知識を授けた”云々という御言葉で告げ給うた通り、ソロモンに預言力と判断力を授け給うた。(167)ダビデに死が訪れた時、彼は息子のソロモンを受託者となし、アッラーに召された。彼は40年間パレスティナとヨルダンの王であった。(168)彼の軍隊は剣と楯とを持つ60000名の、剛毅で勇敢な、まだひげの生えていない若者から成っていた。(169)

（§105）ダビデの時代、エイラトとミディアンの地に賢人ルクマーン、即ちサルール（ツェロル？Ṣarūr）の子ミディアンの子エファ（Īfā）の子ルクマーンがいた。(170)彼はヌビア人（Nūbī）であり、カイン・ブン・ジャスル（al-Qayn b. Jasr）のマウラー（mawlā 解放奴隷）で、ダビデの支配の10年目に生まれた。(171)ルクマーンは正しい僕であったので、アッラーは彼に知恵を授け給うた。彼はアミタイ（Mattā）の子ヨナ（Yūnus）がモースルの地のニネベ（Nīnawā）の住民のもとに遣わされた時代まで、この世界に知恵と禁欲を示しながら、生きていた。(172)

（§106）ダビデが召された時、息子のソロモンが預言力と知恵を引き継いだ。ソロモンの公正さがその臣民を覆い、万事が順調に進み、軍隊も彼に従った。ソロモンは聖殿を建て始めた。それはアッラーがその周りを祝福し給うた至遠の（アクサー al-aqṣā）モスクである。(173)聖殿の建設がなった時、彼は自身のために館を建てた。それは今日、クマーマ（al-Qumāmah）教会と呼ばれるもので、キリスト教徒（an-Naṣārā）の持つエルサレム最大の教会である。(174)また、彼らはエルサレムにこれ以外にも立派な教会を幾つか持っており、その中には、ダビデが述べているシオン（Ṣahyūn）教会と、ダビデ――彼の上に平安あらんことを――の墓があると人々が主張するジュスマーニーヤ（al-Jusmānīyah）で知られる教会がある。(175)アッラーは以前の誰にも授け給わなかったような王権をソロモンに授け給い、御啓典の中で述べ給うた通り、人間、ジン、鳥、風を彼に従わせ給うた。(176)ソロモンがイスラエルの子らの王であったのは40年間で、彼は52歳の時に召されたのである。(177)

Ⅳの注の続き

(125) サーリフは、クルアーン（7:73～79;11:61～66;26:141～59）やマスウーディーによると、上記（注122）のように、サムードの民の預言者で、彼らに奇跡を見せて、彼らを回心させようと努めたが、結局は一部の者にしか受け入れられなかった人物である。彼はサムードの子 Khâdir の子 'Ubayd の子 Mâsikh の子 Asif の子 'Ubayd の子と言われることが多い。Ṭabarī（I,p.244）参照。

(126) 以下、"ファールスの地に居を定めた"まで、Ibn Qutayba（p.27）を利用していると思われる。創世記では、ルドはセムの子孫で、アラムの子孫ではない（10:22～23）。アラムの子孫ならば、ルドではなく、フルとなろうか（10:23）。次に、タスムとジャディースの民［聖書にはない］は、マスウーディーによれば、'真のアラブ'（al-'Arab al-'āribah）［上記のアード族やサムード族も同様］（§950）で、両部族とも下記のヤマーマに住んでいた（§953）［タスムはバハレインにも住んでいた（§1149)］が、憎しみや主権争いのため、約70年で互いに滅んでしまった（§952）とされる。但し、ジャディースはエベルの子（§§1144,1150）とか、ゲテルの子（§953）とされることが多い。アラブの文学では、タスムとジャディースはよく対になって登場し、'失われたアラブ'（al-'Arab al-bā'idah）に数えられる伝説上の部族である。因に、Ṭabarī は Ibn Isḥāq（d.151/768 歴史伝承家）により、ルドはノアの子セムの子で、タスムと下記のイムリークの父であると（I,p.213）、また、ノアの子セムの子アラムには、ウツとゲテルとフルが産まれ、ジャディースはサムードと共にゲテルの子であるとしている（I,pp.214～15)。マスウーディーがタスムとジャディースの居所とする（§953）ヤマーマは、アラビア半島の、現リヤードを中心とするアーリド（al-'Āriḍ）地方の古名。また、マスウーディーがタスムが住んでいたとする（§1149）バハレインは、マスウーディーの当時は、ヤマーマの北東の沿岸地域、現在のバハレイン（バーレーン）島を含むペルシア湾の西南海岸地帯を指すことが多い。

(127) 創世記36:12ではエサウ（セムの子アルパクシャドの子シェラの子エベルの子ペレグの子レウの子セルグの子ナホルの子テラの子アブラハムの子イサクの子）の子エリファズの子にアマレクがおり、本書のここにアラム［創世記10:22では、セムの子］の孫（＝§1146）、或はルド［同じくセムの子］の子（＝§953）として登場するイムリーク［Ya'qūbī（I,p.47）ではセムの子ルドの子］とは異なっている。そして彼の子孫とされるアマレク人は、聖書では、創世記14:7などにカデシ（シナイ東北部）を中心とする民として登場する。但し、本書でも§716においては、アマレク人は'失われたアラブ'で、シリアにおり、エサウ（'Īṣū）の子エリファズ（Alīfaz）の子の一人だと言われたとあり、聖書に準じている。また本書では、アマレク人は旱魃のイエメンを後に（§938）、水や草や定住地を求めてティハーマ（Tihāmah アラビア

半島西岸地方）へ向かい（§939）、ハガル（Hājar）とイシュマエル（Ismā'īl）の住むメッカの谷間に彼女の許しを得て住み着き（§940）、一時カアバ神殿（al-Bayt）の管理権を獲得した（§946）とか、アマレク人の王 al-Walīd b. Dūma'がシリアからエジプトに進んでエジプトの王座を握り（§808）、以後、［少なくとも］4名のエジプト王はアマレク出身であった（§§808〜09,821）とか言われている。その他、イシュマエルは大きくなると、父アブラハム（Ibrāhīm）の言葉を捨てて、アラビア語を話すようになり（§940）、アマレク人 Sa'd の娘 al-Jadā'と結婚した（§941）という話もある。

(128) ウマイムは、マスウーディーによれば、テントではなく、木を使った、屋根付きの家屋を建てた最初の人である（§1166）。Ṭabarī（I,p.214）では、セムの子ルドの子で、一族はアーリジュの砂地のワバールの人々［下記の注130参照］だとなっている。ファールスは、イラン南西部、ペルシア湾に面する地方で、古代ペルシア発祥の地である。

(129) カユーマルトは、'Abd al-Ḥamīd 版では Kayûmart となるが、マスウーディーによれば、このウマイムの子（§1166）、或はアダムの長男（§530）という説もある。しかし、一般にヤフェトの子で、聖書のゴメル（創世記10:2）に当たると考えられることが多い。Ṭabarī（I,pp.17,147）参照。その他、拝火教徒（al-Majûs）などペルシア人（al-Furs）は、アダムとみなすようだ。Ṭabarī（I,pp.17,147,154,199）参照。

(130) ワバールの地とは、イエメンのシフル（ash-Shiḥr）とサヌア（Ṣan'ā'）との間にある地と思われる（Yâqût, V ,p.356）。また、マスウーディーは、ワバールをノアの子セムの子アラムの子ルドの子ウマイムの子で、一族はアーリジュの砂地に落ち着いた云々とも記している（§1161）。

(131) マスウーディーは、アビールとその一族はメッカとメディナとの間にあるジュフファ（al-Juḥfah）の地に住んでいたが、洪水によって滅んだとも記す（§1177）。Ṭabarī（I,p.219）もアビール［或はウバイル］はウツの子でアードの兄弟とする。そして、アッラーの使徒の町とは、メディナのことである。

(132) 以下、"言葉を分け給うた"まで、Ibn Qutayba（p.28）を利用していると思われる。マシュ（'Abd al-Ḥamīd 版では Mâsh）は創世記10:23参照。ニムロド（'Abd al-Ḥamīd 版では Nimrûdh）は、創世記10:8〜12ではハムの子クシュの子とあり、マスウーディーの本書にも、他の箇所（§§1103,1141）では、ノアの子ハムの子クシュ（Kûsh）の子ニムロド［1世］が挙がっている。尚、Ya'qûbī（I,p.17）にもセムの子アラムの子マシュ（Mâsh）がバビロンの地に行き、'暴君'ニムロドが生まれたという、類似の記述が挙がっており、上記の Ibn Qutayba の他に、こちら［その情報源も含む］との関連も考えられる。

(133) 創世記には、彼の統治期間への言及がない（10:8〜12）上、バベルの塔の建設や下記の言葉の分裂に関しては、彼が登場しておらず、言葉の数も言及がない（11:4〜9）。マスウーディーには、バビロンの最初の王、'暴君'（al-jabbâr, cf.創世記10:9〜10 '力ある'）ニムロドは約60年支配し、ユーフラテスから引いた諸運河（anhâr）を掘った（§523）ともある。因に、下記の§74では、'暴君'ニムロドなる者がレウ（Ar'ū）の時代に生まれたとあるが、Ya'qûbī（I,p.18）では、レウ（Arghū）の時代に、'暴君'ニムロドがおり、この人物がバビロンに居し、塔の建設を始め、67年支配したとなっている［注(132)の Ya'qûbī の記事も参照］。更に Ṭabarī（I,p.320）ではカナン（Kan'ân）の子クシュの子ニムロドが400年間暴君で、天に向かう塔を建設したとある［マシュの子ニムロドは登場しない］。また、ナバタイ人は、マスウーディーによれば、ノアの子セムの子アラムの子マシュの子 Nabīṭ の子孫で（§§953〜54）、バビロン地方を建設し（§1103）、イラーク（al-'Irâq 現イラク南半）を支配したが、現在（＝マスウーディーの当時）は弱体化している（§954）。このように、B.C.5C頃以降、死海の南方ペトラを中心に栄えたナバタイ人の名前が、アラブの征服後、イラークの人々と結びつけられてくる。

(134) §1141では、クシュの子ニムロドの時に、セムの子孫が19、ハムの子孫16、ヤフェトの子孫が37の言葉に分かれたことになっている。また、Ya'qûbī（I,pp.17,18）には、マシュの子ニムロドの時に、それぞれ19、16、37に、Ṭabarī（I,p.220）には、カナンの子クシュの子ニムロドの時に、18、18、36に分かれたとある。

(135) "本書の中で後に（＝この場所の後、この書の来るべき所において）〈人々の離散……を述べる〉"が、'Abd al-Ḥamīd 版では"この我らの書にあるその場所において、これを〈述べる。〉そして〈人々の離

散……〉"。

(136) 創世記10:25参照。Ṭabarī (I,pp.216～17) にも、同様な説明が載っている。

(137) 創世記10:24～25では、アルパクシャドの子シェラの子はエベルだけで、ペレグはエベルの子とあり、マスウーディー自身も、下記（§§73～74）では、聖書と同様、ペレグはシェラの子エベルの子としており、ここはマスウーディーの誤謬と思われる。因にṬabarī (I,pp.216～17) でも地が分けられた時のペレグはシェラの子エベルの子とある。次文のペレグからアブラハムは、創世記11:18～26参照。

(138) 以下、"……王者の挨拶を……受けた最初の者である"までは、Ibn Qutayba (p.27) を利用していると思われる。創世記10:25では、下記（§72の最初の文）と同様、エベルの息子はヨクタンである。Ya'qūbī (I,p.220) ではカフターンはシェラの子エベルの子預言者フードの子で、ヤアルブはカフターンの子とある。またṬabarī (I,pp.216～17) ではエベルの息子はペレグとカフターンで、カフターンの息子はヤアルブとヤクターン（Yaqṭān、或はヨクタン）とある。カフターンは、下記（本節の後半）のように、イエメン人、即ち南アラビア人の祖先とされ、北アラビア人の祖先とされるアドナーン（'Adnān)、或はその孫のニザール（Nizār）と対比される（§956;cap.103他）ことが多い。但し、マスウーディーはここ（本節の後半）では、カフターンがアラビア語を最初に話した者としているが、他の箇所（§997）では、カフターンはシリア語を話し、息子のヤアルブがアラビア語を話すようになったとしている。A.FischerとA.K.Irvineによれば、カフターンは西暦2世紀の碑文にその名が登場し、プトレマイオスPtolemaeusの『地理学入門』に記されているKatanitai族（vi･7･23）とも同一視されうる部族で、現在、カフターンと呼ばれる大部族集団は、大部分が遊牧生活を送り、サウディ・アラビア西南部のBīshahと中央部Ḥawṭahとの間に広がっている（"Ḳaḥṭān",*E I*②,Ⅳ,p.448)。また、次文のヤアルブは、マスウーディーによれば、上記と同様、アラビア語を話した［最初の］者で、バビロンで言葉が分かれた後、一族郎党を引き連れてイエメンに移った（§§1141～42)。Ibn Qutayba (p.27) も、彼がアラビア語を話した最初の者とする。アラブの伝説では紀元前794年頃の人物で、イエメンの地の支配者であり、ヒムヤル王たちの祖先に当たるとされ、最初にアラビア語を話したのでya'rub（アラビア語を話すの意）と呼ばれた（A.Grohmann, "Ya'rub",*E I*①,Ⅳ,p.1160)。

(139) Ibn Qutayba (p.27 "王者"が単数形でなく複数形である点以外は同文）の他、Ya'qūbī (I,p.220) にも類似の内容があるが、この挨拶の文句はジャーヒリーヤ時代に使われていたもののようだ（*Tāj al-'Arūs*, Ⅸ,p.82,Beirut)。また、Ṭabarī (I,p.217) には、カフターンがこの挨拶［但し、後半部だけ］を受けたとある。次文のヒーラは、現イラク中部、Al-Kufaの南約3キロ、ユーフラテス河右岸にあった都市であり、ヒーラの王とは、3世紀頃から602年まで、当地に都を置き、キリスト教ネストリウス派を奉じ、サーサーン朝ペルシアの衛星国として栄えた、南アラブ系のラフム（Lakhm）朝の君主たちのことである。

(140) §72の終わりまで、ほぼ同じ文がIbn Qutayba (p.27) にあり、マスウーディーはこれを写したか、少なくとも利用したのではなかろうか。ここではヨクタン［或はヤクターンという別人か］とカフターンを兄弟扱いしているが、他の箇所（§994）では、ヨクタン（Yuqṭan？）をカフターンと同一視する説も挙げており、アラブではカフターンの系図を旧約のヨクタンの系図と同じとみなすことが多々ある（"Ḳaḥṭān" *E I*②,Ⅳ,p.448)。Ṭabarī (I,p.219) や創世記10:25参照。ジュルフム（或はJurham）族は、マスウーディーによれば、上記（注127）のアマレク人と同様、旱魃のイエメンから（§938）メッカに移り（§942)、イシュマエルの子Nābitの死後、［アブラハムとイシュマエルが建てた］カアバ神殿を管理した（§945)。一旦はアマレク人との戦いに敗れて、神殿の管理権を奪われたが、やがてこれを奪いかえし、約300年間、権力を維持した（§946)。その終わりにはこの一族は堕落し、神殿を汚す者が続出するに至った。アッラーは嵐、雲、蝗その他をジュルフム族のもとに送って怒りを示し給い、多くの者がそのために命を落とした。そこでイシュマエルの子孫が繁栄して力を握り、ジュルフム族をメッカから追い出した。後日、ジュルフム族はアッラーの怒りにより、激流に襲われて滅び去った（§947)。また、イシュマエルはアマレク女性al-Jadā'を離縁した後、ジュルフム族の女性Sāmahと結婚した（§941～43）とのことである。一般にジュルフム族は、イエメンから共にメッカに移住した下記のカトゥーラー族との

闘争を経て、メッカの支配権を握り、Khuzâ'ah族とKinânah族によってこの町から追放されるまで、権力をほしいままにしたと伝えられ（Ibn Hishâm（d.218/813）：*Sîrat Rasûl Allâh*, ed.Muḥammad Muḥyî ad-Dîn 'Abd al-Ḥamîd, I,p.123,1937, Cairo）、また、'失われたアラブ'部族に数えられることが多いが、W.Montgomery Wattの挙げる証拠に従えば、イスラーム以後まで生きのびて残っていたようであり（"Djurhum", *E I*②,II,pp.603〜04）、Jawâd 'Alîは、滅んだ第1ジュルフムと生き残ったカフターン系の第2ジュルフムとに分けている（*al-Mufaṣṣal fi Târîkh al-'Arab qabla al-Islâm*,I,p.345, 1969,Baghdad）。

(141) カトゥーラーは、メッカの下手に住み着き、上手に住み着いたジュルフム族（カトゥーラー族は彼らのおじの子供たち）と、カアバの管理権をめぐって、激しい抗争を繰り返した後、メッカから追放されたとされる（Ibn Hishâm:ibid.）。そして、マスウーディーには、ジュルフムはメッカの上手Qu'ayqi'ânに住み、アマレクはメッカの下手Ajyâdに住む（§945）とあることから、カトゥーラーはマスウーディーに登場するアマレク人の一つではないかと思われる。

(142) このレメクは、本書§§63〜64中のレメク（メトシェラの子で、ノアの父）とは別人で、Ya'qûbî（I,pp.13〜15）では、このレメクの子Malkayzadaqがアダムの墓守を託される。

(143) 彼の寿命は創世記11:10〜11やYa'qûbî（I,p.15）、Ṭabarî（I,p.223）と同様。但し、Ya'qûbî（同）では、セムの死は9月7日、木曜。

(144) 彼の寿命は創世記11:12〜13やṬabarî（I,p.223）では、438歳。Ya'qûbî（I,p.16）では、アルパクシャドの死は4月23日、日曜、465歳。

(145) 彼の寿命は創世記11:14〜15やṬabarî（I,p.224）では、433歳。Ya'qûbî（I,p.16）では、シェラの死は3月13日、月曜、430歳。

(146) 彼の寿命は創世記11:16〜17では464歳、Ṭabarîi（I,p.224）では、474歳。Ya'qûbî（I,p.16〜17）では、エベルの死は10月23日、木曜、340歳。

(147) 彼の寿命は創世記11:18〜19やYa'qûbî（I,p.17〜18）、Ṭabarî（I,p.224）と同様。但し、Ya'qûbî（同）では、ペレグの死は9月12日、金曜。"239歳"が、'Abd al-Ḥamîd版では、"230歳"。次文は、§§70〜71参照。

(148) レウが'Abd al-Ḥamîd版では、Ra'û。次文は、注(133)参照。

(149) 彼の寿命は創世記11:20〜21やṬabarî（I,p.224）では、239歳。Ya'qûbî（I,p.18）では、レウの死は4月14日、水曜、200歳。

(150) 彼の寿命は創世記11:22〜23やYa'qûbî（I,p.19）、Ṭabarî（I,p.224）と同様。但しYa'qûbî（同）ではセルグの死は8月27日、日曜。

(151) ナホルが'Abd al-Ḥamîd版では、Nâḥûr。

(152) 創世記11:24〜25やYa'qûbî（I,p.19）では、148歳。Ṭabarî（I,p.225）では248歳。

(153) クルアーン6:74に"アブラハムがその父アーザルに……"とある。創世記15:2に登場するダマスコのエリエゼル（アブラハムの僕）から来ているのだろうか（A.Jeffery,"Âzar", *E I*②,I,p.810）。

(154) このニムロドは、本書§1103にノアの子ハムの子クシュの子ニムロド1世の子センナケリブ（Sannajârîb）の子カナンの子とある人物と思われる。そして、クルアーン2:258の"アブラハムに彼の主について議論を吹っかけた例の男"に当たるのではなかろうか。イスラーム世界の伝説では、ニムロドはバビロンの王で、全世界を支配し、或はバベルの塔を建設したともされ、アブラハムの誕生を阻止しようとした云々［以下は本稿第4章の翻訳と注を参照］と言われる場合が多く、Ṭabarîでは、バビロンの暴君でハムの子クシュの子ニムロド（I,pp.216,217）、バビロンとアブラハムのあるじ（アッラーがバビロンで言葉を混乱させた時の支配者、或はアブラハムの時代の全世界の王）でハムの子カナンの子クシュの子ニムロド（I,pp.219,220,319,323）、その時代にアブラハムが生まれたクシュの子ニムロド（I,p.253）、全世界を支配した最初の王でセム？の子クシュの子カナンの子ニムロド（I,p.254）、同じくレウの子ニムロド（I,p.253）、アブラハムの誕生を阻止しようとしたニムロド（I,pp.254〜55）などが、Ibn Qutaybaでは、上記のマシュの子ニムロドの他、Wahb b.Munabbihの言として、主についてアブラハムと議論し

たカナンの子ニムロド（p.31）が、更にはYa'qūbīにも、上記（注130,131）の他、その時代にテラ（Ṯārakh）がおり、人々が星学に没頭し、自身は火を崇拝し、占星術師たちの進言に従ってアブラハムの誕生を阻止しようとした暴君ニムロド（I,pp.20〜21）が挙がっている。

(155) 創世記11:32では、205歳。Ya'qūbī（I,p.21）でも、205歳。'Abd al-Ḥamīd版では、この文の後に“そしてアッラーは正しいことに成功を与え給うお方である”が続く。

Ⅴ の 注

Ⅳの注の略記を踏襲するが、新たに*Maçoudi, Les prairies d'or*, Texte et traduction par C.Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, tome Ⅰ〜Ⅸ, Paris, 1861〜77の仏訳を*Maçoudi*、*Mas'ūdī, Les prairies d' or*, Traduction française de Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, Revue et corrigée par Charles Pellat, tome Ⅰ〜Ⅳ, Paris, 1962〜89を*Mas'ūdī*、*Atlas du monde arabo-islamique à l'époque classique IXe-Xe siécles* par Georgette Cornu, Leiden, 1985を*Atlas*と略記する。そして、この4章以下では、紙幅の都合上、'Abd al-Ḥamīd版において、単語や表現が異なっていても、邦訳としての意味に殆ど違いがない場合は、記さない。また、固有名詞の綴りの違いも多数にのぼるので、列挙しないことにする。

（1）'Abd al-Ḥamīd版では、アブラハムに“［アッラーの］友”が付いていない。

（2）ここまでYa'qūbī（I,p.21）と類似する。'Abd al-Ḥamīd版では、括弧扱いだが、“世界の全体”を、“大地と世界の全体”と読む。引用部“これぞ我が主である”は、クルアーン6:76だが、クルアーンでは、この後に“やがて、それ（＝或る星）が沈んだ時、彼は言った、「沈むものは好きでない」”（6:76）と続き、クルアーンと同様な記述がṬabarī（I,pp.225,258—星の名が木星とあり、洞窟から出たという記述［クルアーンにはない］もある）に見られ、またYa'qūbī（I,p.21）には、“星が沈むと、彼は「我が主は沈まない」と言った”とある。

（3）ここではクルアーン6:77に、“しかし、それ（＝太陰）が沈んだ時、彼は言った、「もしも主が私を導いて下さらなかったら、きっと迷える民の仲間になっていただろう」”とあり、Ṭabarī（I,pp.255,258［Ibn 'Abbāsに拠る］）やYa'qūbī（I,p.21）も同様である。

（4）'Abd al-Ḥamīd版では“太陽の光”が“太陽”で、“これぞ我が主である”の後に、クルアーン6:78の通り、“これが一番大きいから”が加わる。この箇所も、クルアーン6:78〜79では、“やがて、それが沈んだ時、彼は言った、「人々よ、私はお前達が併置する連中とは無縁である。私は天地を創り給うたお方に、純正の信者として顔を向けている。多神教徒ではないのだ」”と続き、Ṭabarī（I,pp.225,258［Ibn 'Abbāsに拠る］）に同様な記述が見られ、Ya'qūbī（I,p.21）では“「これぞ我が主である。これが一番輝いて明るいから」と言ったが、太陽が沈んだ時、「それは沈んだ。我が主は沈まない」と言った”とある。

（5）前半（ガブリエル……教え）はYa'qūbī（I,p.22）にも同様な記述が見られる。後半はクルアーン参照［預言者（4:163,19:41,33:7）、友人（4:125）］。ガブリエルについては、本稿(2)のⅣ（第3章）の注21参照。

（6）引用部はクルアーン21:51。

（7）以下、§76の終わりまで、クルアーン21:52〜70や、クルアーンの記述を詳しく説明したṬabarī（I,pp.258〜66）、更にはYa'qūbī（I,p.21〜22）参照。尚、“彫像（al-manḥūtāt）”が、'Abd al-Ḥamīd版では“くぼんだ物、空洞の物（al-mujawwafāt）”。

（8）ニムロドは本稿(2)のⅣの注154参照。

（9）引用部はクルアーン21:69で、後半（火が……消えた）はṬabarī（I,p.264）ではIbn 'Abbāsが言ったとある。Ya'qūbī（I,p.22）も参照。

(10) 創世記16:16や、Ya'qūbī（I,p.22）、Wahb b. Munabbih（d.110/728 or 114/732〈以下、Wahbと表記〉）に拠ると言うIbn Qutayba（p.33）と同様である。'Abd al-Ḥamīd版では、括弧扱いだが、“86年”の後に“或は87年”が加わる。

(11) ハガルがサラの女奴隷というのは、創世記16:1やYa'qūbī（I,p.22）と同様で、Ṭabarī（I,p.268）では、ハガルはファラオがサラに与えたコプト人（即ちエジプト人）奴隷とある。

(12) ナホルの子ベトエルの娘は、イサクの妻リベカであり（創世記24:15,24:24）、マスウーディーはアブラハムの兄弟である、このナホル（同24:15）と、アブラハムの祖父ナホル（同11:24～26）とを混同している。Ibn Qutayba（p.31）ではサラはアブラハムの父テラの子ハランの娘で、ロトの姉妹、Ya'qūbī（I,p.22）ではアブラハムの父方のおじナホル（Nāḥūr）の子ハラン（Khārān）の娘、Ṭabarīではセルグ（Sārū'）の子ナホル（アブラハムの祖父）の子ベトエル（Batwīl）の娘（I,pp.347～48）、或はアブラハムの父方のおじ大ハラン（Hārān）の娘（I,p.266）、或はハランの娘（I,pp.343,345）、或はナホルの娘（I,p.325）かナホルの娘Hanālの娘（I,p.325）、更にはハラン（Ḥarrān）王の娘（I,p.266）とある。マスウーディーの次文には、他の説を後述するとあるが、実際には後述していない。

(13) ロトの系図は創世記11:24～27やIbn Qutayba（p.31）やYa'qūbī（I,p.22）やṬabarī（I,pp.266,326）とも一致する。

(14) 創世記13:11～12（ロトが自らソドムを選ぶ）参照。Ya'qūbī（I,p.22）ではアブラハムがロトにソドム（Sadūm）とゴモラ（'Umūrah）に落ち着くよう命令したとあり、Ṭabarīではアッラーがロトをソドムの住民に遣わしたという記述（I,p.326）が支配的である。次の5都市は創世記10:19,14:2,14:8、申命記29:22や、Ṭabarī（I,p.343［Ṣab'ah,Ṣa'rah,'Amarah,Dumâ,Sadūm］）参照。

(15) Ṭabarī（I,p.342）にはal-Mu'tafikahは転覆されたものという意味が出ている。クルアーン11:82参照。

(16) “アッラーはそのことを”が、'Abd al-Ḥamīd版では“アッラーは彼らのことを”とある。引用部はクルアーン53:53。

(17) Ṭabarīでは、メディナとシリアとの間にあり（I,p.342）、ベエル・シェバ（［Bi'r］as-Sab')からおおよそ1昼夜の行程（I,p.271）とある。ソドムもゴムラも現在は死海南東端の海中に没しているようだ。

(18) “人影（anīs）”が、'Abd al-Ḥamīd版では“誰一人（aḥad）”。'目印の付いた'はクルアーン11:83参照。

(19) 次文と共にクルアーン7:80～84,11:77～83,15:61～77,26:160～74,27:54～58,29:28～35,54:33～39、創世記19章、Ya'qūbī（I,pp.23～24）、Ṭabarī（I,p.326～43）参照。

(20) “アッラーが彼らについて語り、述べ給うた通り（＝アッラーが語り給うた彼らの話、アッラーが述べ給うた彼らの事柄に従えば）”が、'Abd al-Ḥamīd版では“アッラーが告げ給うた彼らの事柄に従えば”。

(21) 次文まで、同様な記述がYa'qūbī（I,p.23）にもある。Ṭabarī（I,p.277）も参照。

(22) “［彼ら］二人を（humâ）”が'Abd al-Ḥamīd版では“彼女を（hâ）”。Ibn Qutayba（p.34）では、アッラーがメッカ行きを命じたとある。尚、聖書では、イサクが生まれた後、ハガルとイシュマエルだけが去り、ベエル・シェバの荒野をさまよう（創世記21:14）。

(23) この箇所が'Abd al-Ḥamīd版では、“そのことは、“我らが主よ、我は子孫の或る者をあなたの聖なる館の傍らにある耕せない谷間に住まわせました”というアブラハムの言葉を通して知らせ給えるアッラー――至高至大におわす――の御言葉にある”。引用部はクルアーン14:37。マスウーディーは他の箇所では、アブラハムはイシュマエルとハガルを“耕せない谷間”（クルアーン14:37）に置き去りにしたが、アッラーが2人のためにザムザム（Zamzam）の泉を沸き出たせた（§996）とあり、ムスリムの間では、イシュマエルの喉の渇きがひどかったので、ハガルが水を求めてサファー（aṣ-Ṣafâ）とマルワ（al-Marwah）というメッカにある2つの丘の間（クルアーン2:158参照）を3往復半した末、イシュマエルの足元にザムザムの泉が涌いているのを見付けたというのが、通説である。Ṭabarī（I,pp.276,279～81,282～83）やYa'qūbī（I,p.23）参照。創世記21:15～19も参照。

(24) 引用部はクルアーン14:37。Ibn Qutayba（p.34）ではジュルフム族だけが登場する。ジュルフム族とアマレク人に関しては、各々本稿(2)のⅣ（第3章）注140と127参照［マスウーディーによれば、イシュマエルはアマレク女性ともジュルフム女性とも結婚］。イシュマエルのその後は本第5章§116参照。

(25) 以下、“……贖い給うた”まで、クルアーン37:102～07、創世記22:1～19参照。そして下記の注30も参照。

(26) 引用部はクルアーン37:103。

(27) 引用部はクルアーン37:107。

(28) クルアーン2:125～29参照。引用部はクルアーン2:127。Ya'qūbī（I,p.25）やṬabarī（I,pp.277,282,285～86,287）では、イサクの誕生後と思われる。

(29) サラからのイサクの誕生は創世記21:2参照。その時のアブラハムの年齢は創世記21:5では100歳で、Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.33）やYa'qūbī（I,p.24）も同様だが、Ṭabarī（I,p.273）では120歳とある。

(30) イサク説とイシュマエル説については、Ṭabarī（I,pp.290～307）やIbn Qutayba（pp.35～38）、Ya'qūbī（I,pp.25～26）も詳しい。

(31) "ミナー"が'Abd al-Ḥamīd版では"ヒジャーズ（al-Ḥijāz)"。ミナーは本稿(2)のⅣ（第3章）注82参照。

(32) ケトラとの結婚と6名の男子は創世記25:1～2や、Ya'qūbī（I,p.26)、Ṭabarī（I,p.345）参照。Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.33）では、ケトラの子は4名であり、アブラハムはḤajūrâという女性とも結婚し、更に7名の子供が生まれたとある。

(33) 没年は創世記25:7と同様である。この"175歳"が、'Abd al-Ḥamīd版では"195歳"。また、Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.33）では175歳または200歳、Ṭabarī（I,p.349）でも200歳または175歳、そしてYa'qūbī（I,p.26）では195歳で、8月10日の水曜とある。

(34) 'Abd al-Ḥamīd版では、"アッラーは彼の上に10葉の聖冊を下し給うた"。クルアーン87:19参照［クルアーンには10という具体的な数はない］。Ṭabarī（I,p.350）ではこの10葉の聖冊は全て金言とあり、Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.32）では聖冊は20葉とある。

(35) "アブラハムの死後"が、'Abd al-Ḥamīd版では"アブラハムの後"。また"彼にエサウ……が生まれた"が、'Abd al-Ḥamīd版では"彼女は彼にエサウ……を生んだ"。聖書ではアブラハムの存命中に、イサクとリベカが結婚し（創世記25:20,24:67)、エサウとヤコブが生まれた（創世記25:26）とあるが、Ya'qūbī（I,p.26）もマスウーディーと同様である。リベカの系譜は創世記22:23やYa'qūbī（I,p.26）と一致する。Ṭabarīにはアブラハムの兄弟ナホルの子ベトエルの娘（I,p.351）説の他、Ilyâsの子ベトエルの娘（p.354）説やアーザル（＝アブラハムの父テラ）の子ナホルの娘（I,p.355）説も登場する。Ibn Qutaybaではリベカは Wahbに拠るとしてアブラハムの兄弟ナホル（Nâhar）の娘（p.31)、テラの子ナホルの娘、或はWahbに拠るとしてAzrâ（アーザルÂzarの誤記）の子Bâhar（ナホルNâharの誤記）の娘（p.38）とある。

(36) "この世（＝空間）（al-faḍâ')に出た"が、'Abd al-Ḥamīd版では"分かれた（al-faṣl)"。創世記25:24～26や、Ibn Qutayba（p.38)、Ya'qūbī（I,p.26)、Ṭabarī（I,pp.354,357,358）参照。

(37) 60歳は創世記25:26や、Ya'qūbī（I,pp.26～27)、Ṭabarī（I,p.357）と一致する。

(38) 創世記27章や、Ya'qūbī（I,p.27)、Ṭabarī（I,pp.357,358～59）参照。

(39) 創世記35:28では180歳で、Ibn Qutayba（p.38）も同様である。Ya'qūbī（I,p.27）はマスウーディーと同様に185歳だが、Ṭabarī（I,p.371）では160歳とある。

(40) エルサレムから18マイルの地とはヘブロン（Ḥabrūn）のことであり、聖書ではカナン地方のヘブロンにあるマムレの前のマクペラの畑とそこの洞穴（創世記23:19～20）とあり、Ibn Qutayba（p.38）ではアブラハムが買い取った畑（農地)、Ṭabarī（I,p.371）ではヘブロンの畑（農地）とある。

(41) 前半部に関しては、Ya'qūbī（I,p.28）ではシリアのファッダーン（al-Faddân［Yâqût（Ⅳ,p.238）によれば上メソポタミア（al-Jazîrah）のハラン（Ḥarrân）地方の村］）とあり、創世記28:10に準ずる。

(42) 創世記29:32～35,30:6～8,30:9～13,30:22～24,35:18,35:23～26や、Ya'qūbī（I,p.29)、Ṭabarī（I,pp.354～55）参照。'Abd al-Ḥamīd版では"レビ、ユダ（Yahūdhâ)、イサカル（Yasâkhar）……ダン（Dân)、ナフタリ（Niftâlī)、ガド（Kân)、アシェル（Ishâr)、シメオン、ルベン（Rūbīl)"の順である。

(43) 以下、"……ことであった"まで、創世記32～33章、Ṭabarī（I,p.357）参照。聖書では山羊・羊・駱駝・牛・驢馬を計550頭（創世記32:15～16）とある。

(44) "〈エサウの悪行〉を避けようとして（istikfâfan）"が、'Abd al-Ḥamīd版では"〈エサウの悪行〉に

気を取られ（istikfā'an)"。

(45) 次文にあるアッラーの啓示共々、クルアーンばかりか、Ibn Qutayba以下の参照3文献にも見当らない。

(46) "〈お前は我が言を〉信頼しなかった"が、'Abd al-Ḥamīd版では"〈お前は我が言を〉信頼しなかったのか"。

(47) ウマル・ブン・アル＝ハッターブは正統第2代カリフ。神殿は70年に破壊され、ウマルは638年にエルサレムを開城したので、その期間は568年となる。

(48) 以下、次文までクルアーン12:4～101［12章のタイトルはヨセフの章］の他、創世記37章、39～47章や、Ya'qūbī (I,p.28)、Ṭabarī (I,pp.373～411) 参照。

(49) 彼の没年は創世記47:28では147歳とあり、Ibn Qutayba (p.40) やṬabarī (I,p.371) も同様である。Ya'qūbī (I,p.29) はマスウーディーと同じである。

(50) 創世記50:7～13や、Ya'qūbī (I,p.30)、Ṭabarī (I,p.413) 参照。

(51) 彼の没年は創世記50:26やIbn Qutayba (p.41)、Ya'qūbī (I,p.30) と一致する。この"110歳"が、'Abd al-Ḥamīd版では"120歳"となり、Ṭabarī (I,pp.412～13) と同様である。"継ぎ合された (shudda)"が'Abd al-Ḥamīd版では"ふさがれた (sudda)"。Ya'qūbī (I,p.30) やṬabarī (I,p.413) の他、創世記50:26も参照。メンフィスはファラオの都で、現カイロの南2km、ナイル西岸Bedrechein (al-Badrshīn) のすぐ北にある。

(52) 創世記50:25や、Ya'qūbī (I,p.30)、Ṭabarī (I,p.413) 参照。マスウーディーは他の箇所で、預言者ヨセフが諸ピラミッドを建設し、ナイロ・メーターをメンフィスに設置したと人々が言うのを自分は聞いた（§781）とか、ヤコブの子ヨセフはal-Fayyūm運河とal-Munhâ運河を掘った（§783）と記す。

(53) "ヨブ"が'Abd al-Ḥamīd版では、"預言者ヨブ"。Wahbに拠ると言うIbn Qutayba (p.42) や、Ṭabarī (I,p.364) ではヨブはヤコブの時代にいたとある。

(54) ヨブの系図はYa'qūbī (I,p.30) と同一。Wahbに拠ると言うIbn Qutayba (p.42) や、Ṭabarī (I,p.361) では、ヨブはRaghwīl (Ra'wīlの誤記) の子Mawṣ (＝Amûṣ) の子で、母親はロトの娘とある。但し、Ṭabarī (I,p.361) には、Wahbに拠るとして、ヨブはルーム (ar-Rûm) 人でエサウの子Rāziḥ (Zāraḥの誤記) の子Mawṣの子という説も挙がっている。尚、聖書七十人訳はヨブをエサウの子レウエル（創世記36:10）の子ゼラ（同36:13）の子でエドムの第2王ヨバブ（同36:33）に同定する。そして聖書には彼はウツの地［パレスティナとアラビアとの境に沿った地域？］にいたとある（ヨブ記1:1)。ハウランは聖書にはダマスコの南の地方でギレアド［ヨルダン河東の或る地域］と境を接していた（エゼキエル書47:16,18）とあるが、ギリシア・ローマ時代には狭義のハウランはAuranitis［ハウラン山（ジェベル・ハウラン）］地方として知られ、現シリアの南部地域の玄武岩地帯を指し、イスラーム期に入っても、中心都市はBuṣrâ［現シリア南端に近いBusra］であった。尚、広義には聖書のバシャン（申命記1：4；3：4,10；4：43他）にも当たり、下記のバタネヤを含む。バタネヤ、即ちローマ時代のBatanaeaは、狭義のハウランの西に位置する平野地帯で、Adhri'āt［現シリア南端に近いDer'â］を中心都市とする。ジャービヤはダマスカスの南南西、約80kmに位置し、Ghassān朝が一時首都を置いたこともある。'Abd al-Ḥamīd版では、"の間にある、ヨルダン"が括弧扱いで、Ibn Qutayba (p.42) や、Ṭabarī (I,p.362) では、共にWahbに拠るとして、ヨブはバサニーヤを領有していたとある。

(55) Ya'qūbī (I,p.30) でも同様な記述（ヨブが過ちを犯したのでアッラーは彼に試練を与え給うた）だが、Ṭabarī (I,pp.362～64) にはWahbに拠るとして聖書（ヨブ記）と同様な記述がある。

(56) クルアーン21:83～84,8:40～44参照。

(57) 沐浴した泉はクルアーン38:42参照。ナワーは現シリアDer'â〈注54参照〉の北北西、ヤルムーク川［現シリア西南端］より西にある町で、当時はバタネヤに属した都市。

(58) Ṭabarī (I,pp.361～62) には、ヨブの妻はヤコブの子ヨセフの子エフライムの娘Raḥmahという説より先に、ヤコブの娘レア（Līyâ）という説が挙がっており、Wahbに拠ると言うIbn Qutayba (p.42) にもレア（Ilyâ）説が見られる。

(59) 同様な記述はIbn Qutayba (p.41) やṬabarī (I,p.414) にも見られる。聖書では、マナセの子としてマ

キルが挙がっているが、モーセという名の人物はない（創世記50:23；民数記26:29,32:39)。この人物をMeynardとCourteilleはマキルとする（*Maçoudi*,I,p.91）が、Pellatは否定する（*Mas'ūdī*,I,p.38)。クルアーン18:60～82に登場するモーセがこれに当たると考えられる。［ヤコブの子レビの子ケハトの子］アムラムの子モーセは、出エジプト記6:16～20参照。またヒドルの系譜はIbn Qutayba（p.42）やṬabarī（I,p.415）と同様である［但し、両者ともヒドルの自名はBaliyâとする］。聖書にはマルカーンとヒドルは登場せず、ペレグの子としてはレウが登場する（創世記11:18)。

(60) クルアーン18:65～82に、アッラーから直接に知識を授けられ、モーセが師事しようと付き従ったと記されている人物が、ヒドルを指すと言われる。ヒドルは文字どおりは緑色の［人］の意だが、マスウーディーの第5章§117には、ヒドルはエリミヤ（Irmiyâ）だという説が挙がっている。エリミヤ説はṬabarī（I,pp.415～16［Ūrmiyâ］）にも見られる。オマルは創世記36:4,36:11参照。

(61) 'Abd al-Ḥamīd版では、"エジプトの4代目のファラオに当たり、長寿で身体が大きい"が、"イムラークの子アムルの子ハーラーンの子ライスの子アブー・アル＝ヒルワースの子アブー・ヌマイルの子ムアーウィヤの子ムスアブの子ワリードといった"の後に入る。Wahbに拠ると言うIbn Qutayba（p.43）では、ムスアブの子ワリードというこのファラオ（＝Ya'qūbī,I,p.31）は400歳以上生きた。Ṭabarīには、このファラオはイムラークの子アムルの子カーラーン（Qârân）の子スィルワース（as-Silwâs）の子ヌマイルの子ムアーウィヤの子ムスアブの子（I,pp.378,412～13）ワリード（I,pp.444,445）とある。

(62) 以下、"……殺すよう命じた"まで、クルアーン2:49,7:141,14:6,28:4参照。出エジプト記1:8～22も参照。特に、"占い師"以下の箇所は、同様な記述がYa'qūbī（I,p.31）やṬabarī（I,pp.445～46）にも見られる。

(63) "モーセの事と、彼を大河に投げ込むよう母親にアッラーが啓示し給うた事に関しては、……が起こった"が、'Abd al-Ḥamīd版では"モーセの事では、母親にアッラー――至高至大なり――が啓示し給うた事、即ち、大河に彼を投げ込むようにとのことがあった。そこで彼女は彼を投げ込んだ。以下、……が起こった"。クルアーン20:38～40,28:7～13参照。以後、クルアーンでは、聖書（出エジプト記2:5～10）と似て、モーセはファラオの妻に助けられ、宮廷で成長する（28:9～14)。Ya'qūbī（I,p.31）やṬabarī（I,pp.448～50）参照。

(64) シュアイブは、Ya'qūbī（I,p.32）ではアブラハムの子ミディアンの子エファ（'Iyâ？）の子Nawīb？の子とあるが、Ṭabarī（I,p.365）には、アブラハムの子ミディアンの子Thâbitの子'Anqâの子Ṣayfûnの子という説の他、ミディアンの子孫でミカエル（Mīkā'īl）の子とする説、エトロ（Yatrūn モーセの舅）と同一視する説、Ibn Qutayba（p.41）と同様にシュアイブの祖母はロトの娘とする説などが挙がっている。

(65) クルアーン7:85～93,11:84～95,29:36～37参照。更にクルアーン26:176～89にはシュアイブが叢林の住民に遣わされているが、この住民もミディアンの民と一般に解釈されている。そしてマスウーディーには§1180に、シュアイブの民に関して、彼らは'失われたアラブ'だという説、アブラハムの子ミディアンの子Ya'ṣubの子Jandalの子al-Maḥdの子孫だという説や、このal-Maḥdの子供たちにはAbjad、Hawwaz、Ḥuṭṭī、Kalaman、Sa'faṣ、Qarashatといった王たちがいたという記事、§1182には、シュアイブはミディアンの民を正道へ呼んだが、彼らは彼を嘘つき呼ばわりし、'陰の日'（クルアーン26:189）に彼らの上に懲罰が下されることになった、即ち天の火の門が彼らの上に開かれ、シュアイブは信じた者を連れてミディアンの近くの叢林al-Aykahに逃れたという記述もある。クルアーン29:39ではミディアンの民は大地震にみまわれたとある。またIbn Qutayba（p.42）ではWahbに拠るとして、ミディアンはシュアイブと同族でなく、シュアイブが遣わされた民で、シュアイブは叢林の住民の信者たちと共にメッカに逃れたとある。更にṬabarī（I,pp.365～71）には、陰の日の記述の他に、シュアイブは目が悪かったという諸説が示されている。

(66) クルアーンでも、聖書（出エジプト記2:11～15）と同様、モーセは長じてから、エジプト人がイスラエル人を虐待するのを見て怒り、そのエジプト人を殺し、ミディアンに逃れる（28:15～22)。Ya'qūbī（I,p.32）やṬabarī（I,pp.450～51）参照。

(67) クルアーン28:22～28や、出エジプト記2:16～22、Ya'qūbī (I,p.32)、Ṭabarī (I,pp.458～60) も参照。

(68) 引用部はクルアーン4:164。アロンによる補強はクルアーン25:35,28:35、二人をファラオに派遣はクルアーン10:75,20:43,23:45,28:35参照。クルアーンのより詳しい記述では、ミディアン滞在の後、モーセは火を見て、聖なる谷トワー（Ṭuwā）で主に呼びかけられ、二つのしるし［一つは杖が蛇になる、二つ目は手が白くなる］を授けられ、ファラオのもとにアロンと共に行くよう命じられる（20:10～48,27:7～12,28:29～35)。出エジプト記3～4章や、Ya'qūbī (I,pp.32～33)、Ṭabarī (I,pp.463～64,465～67) 参照。

(69) ファラオの拒否はクルアーン7:123～24,10:76～83,17:101,20:56～71,26:23～49,28:36～38,51:39、ファラオの溺死はクルアーン2:50,17:103,20:78,26:66,28:40,51:40、出エジプトの命令はクルアーン26:52参照。クルアーンのより詳しい記述では、ファラオはモーセの言葉に対して証拠を見せろと言い、モーセが自分の杖を蛇に、自分の手を真っ白にすると、魔法使いたちを集める、しかし彼らは敗れ、モーセの主を信じるが、ファラオはあくまで逆らい［ファラオの一族の上に様々な天譴が下るが、彼らはそれでも傲慢な態度を示したので］、結局海中に溺れる（7:104～36,20:49～79,26:23～66)。出エジプト記5～14章や、Ya'qūbī (I,pp.33～34)、Ṭabarī (I,pp.467～88) 参照。

(70) 出エジプト記12:37やYa'qūbī (I,p.34) と同様である。Ṭabarī (I,pp.479～80) では62万の戦士とある。荒野進入以後、クルアーンでは、モーセの民が水を求めた時、彼が杖で岩を打つと、12泉が沸き出た（2:60,7:160）とか、アッラーは40夜にわたってモーセと契約を結び給うた（2:51,7:142）とある。出エジプト記15:22以下31章までや、Ya'qūbī (I,pp.35～36)、Ṭabarī (I,pp.493～94) 参照。

(71) “かれの預言者モーセ”が'Abd al-Ḥamīd版では、“モーセ”。クルアーン7:145やṬabarī (I,p.491) 参照。出エジプト記31:18,32:15～16（2枚の石板で板の両面に文字が書かれていた）も参照。

(72) 子牛崇拝の目撃はクルアーン2:54や出エジプト記32章参照。クルアーンではこの悪行の首謀者はサマリア人（as-Sāmirī）だとされる（20:85～97)。Ṭabarī (I,pp.489～90,491,494) も参照。

(73) マスウーディーは、クルアーン7:150（モーセは板を投げた）やṬabarī(I,pp.491,494)の記述より、出エジプト記32:19（モーセは板を投げつけ砕いた）やYa'qūbī (I,p.37) の記述に近い。

(74) 前半部は、クルアーン7:154（モーセは板を拾いあげた）とṬabarī (I,pp.494～95) の記述や、出エジプト記34章（モーセが砕いた石板に代わる2枚の石板が再度造られる）も参照。後半部は、出エジプト記40章参照。

(75) 聖書（出エジプト記28～29章ほか）やYa'qūbī (I,p.35) 参照。クルアーンでは、アロンは預言者とある（19:53）が、その他は20:90～94参照。

(76) “〈アロンを〉自分のもとに（ilay-hi）〈召し給い〉”が、'Abd al-Ḥamīd版では“〈アロンを〉荒れ野で（fī at-tīhi）〈召し給い〉”。サラートはアラビア半島西部を縦断する山脈で、3000m級の峰を含み、その西には紅海岸に狭く伸びるティハーマ平野、東には半島中央部に広がるナジュドNajd高原がある。モアブの山とは死海東方の、海抜900mの台地と思われるが、聖書では、アロンはモセラ（申命記10:6）で葬られ、或いはホル山で死に（民数記20:28, 申命記32:50)、彼の兄弟モーセがモアブの地にある谷に葬られた（申命記34:6)。Ya'qūbī (I,pp.40～41) ではアロンはシナイの荒野にある山で死んだとあり、Ṭabarī (I,p.502) にもIbn 'Abbās などに基づくとして同様な説が挙がっている。但し、Ṭabarī (I,p.505) ではアロンは荒野にある洞窟で死に、モーセが彼をそこに埋めたとある。

(77) 'Abd al-Ḥamīd版では、括弧扱いだが“我らが『過ぎ去った民族と消え去った王国に関する時代の情報』の中で述べた”という節が“珍しい話”を修飾する。

(78) 同様の内容がYa'qūbī (I,p.46) にもある。

(79) 'Abd al-Ḥamīd版では“120歳の時に召された”であり、“123歳〈の時に召された。〉また、〈120歳〉の時に召されたとも言われている”が括弧扱い。民数記33:39やYa'qūbī (I,p.41) も123歳、Ibn Qutayba (p.44) では117歳。

(80) “その他の人々”に、'Abd al-Ḥamīd版では括弧扱いだが、“シリアにいた〈その他の人々〉や、それ以外の者たち”が加わる。クルバン人は不明。ミディアン人は聖書ではアブラハムとケトラとの子孫（創世記25:2）で、アカバ湾の東岸を中心に放浪していた。尚、時代は下り、ヨシュアの後である（即ち、

§96）が、聖書にミディアン人とアマレク人と東方の諸民族（アラビア人？）が連合軍として登場する（士師記6:3,33,7:12）。

(81) クルアーン53:36,87:19参照［但し、10という具体的な数はない］。マスウーディーによれば、アダムに21葉、セトに29葉、エノクに30葉（以上§62）、アブラハムに10葉（§80）、そしてこのモーセに10葉で計100葉の ṣaḥīfah になる。Ṭabarī（I,p.350）には Abū Dharr al-Ghifārī（d.31or32/651～53）に基づくとして、アダムに10、セトに50、エノクに30、アブラハムに10、それにトーラー、福音書、詩編、クルアーン（al-Furqān）の計104の啓典をアッラーが下し給うたとある。

(82) 1ミスカールは4.25グラム（J.Allan, "Mithkāl", *E I*②III,p.528）。

(83) "管理人（kāfil）" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "祭司（kāhin）"。

(84) 申命記34:7や、Ya'qūbī（I,p.46）、Ṭabarī（I,pp.444,506）と同様。Ibn Qutayba（p.44）には、モーセはアロンの没後3年生き、アロンの命日に同じ歳（117歳）で没したとある。

(85) 申命記34:7参照。尚、モーセに関する話として、マスウーディーにはその他、アッラーはモーセとイスラエル人を荒野に入れ給い、彼らは40年間そこに留まり（クルアーン5:25～26）、モーセとアロン、モーセと共にいたイスラエル人600000名がこの荒野で死に、子孫たちは彼らを荒野に残した（§1347）とある。

(86) 以下、ヨシュアによる軍事行動はヨシュア記参照。"急ぐことになった" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "進んだ"。

(87) ガウルは文字どおりは底部で、死海を含むヨルダンの地溝帯のこと。エリコは死海の北11km、ヨルダン川の西9kmにある［現代のエリコはより南東に位置］。ゾガルは Yāqūt（III,p.143）によれば、死海の端にあり、エルサレムから3日行程で、*Atlas*（p.12）によれば現ヨルダン領 Safi［死海の南］の東2kmにその遺跡がある。'Abd al-Ḥamīd 版では、この "ゾガル" が括弧扱い。

(88) 悪臭を放つ湖とは、死海のこと。

(89) "彼の時代の前後の哲学者たち" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "彼以外の哲学者たち、彼の時代の前後の者たち" とある。論理学の著者とはオルガノン6篇を著したアリストテレスのこと。

(90) カファルラーとカルウーンの湖とは、現 Hula（Houlé）干拓地（旧 al-Ḥūlah 湖）［ガリラヤ（ティベリアス）湖の北］のこと。同じマスウーディーの『提言と再考』（*Tanbīh*,p.73）では、QadasとKafarlâ の湖とあり、ケデシュ（Qadas）湖と呼ばれることの方が多い。尚、カルウーンは *Atlas*（p.10）によれば、現レバノン、ベカー平原南部のリタニー川の東にある村だが、カファルラーは地名と思われるが、不明。

(91) マスウーディーの著書『時代の情報』と『中間の書』については、本稿(1)を参照。この箇所は 'Abd al-Ḥamīd 版では、"この湖、即ち悪臭を放つ湖には、不思議な話と長い物語があり、我らはそのことを『過ぎ去った民族と消え去った王国に関する時代の情報』で述べた"。

(92) "薬物（'aqqār）" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "塵（ghubār）"。

(93) ウルミヤ（現Rezā'īyeh）とマラーガ（Marâgheh）はレザーイエ（ウルミヤ）湖南部の各々西と東に位置する都市で、現イラン領であるが、当時は共にアルメニア或いはアゼルバイジャンの町に数えられた。カブーザーン、即ち、青いものを意味するこの湖はウルミヤ湖である。Yāqūt（I,p.351）も Urmiyah 湖を動物も魚もその他の生物も生息していない、悪臭を放つ、苦い湖だと説明し、湖の中央に Kabūdhān と言われる山があるとする。

(94) 出エジプト記17:8～16参照。MeynardとCourteille は、スマイダアをシェミダ（民数記26:32,ヨセフの子マナセの子マキルの子ギレアドの子）、フーバルをヘフェル（民数記同,シェミダの兄弟）とみなしているようだ（*Maçoudi*,I,pp.398～99）。マスウーディーに従えば、スマイダアは以下の通り、アマレク人であるが、Ḥayd の子 Karkar の子 Qayṭūr の子 Lâwī の子フーバルの子とも言われ（§939）、アマレク人を率いて、旱魃のイエメンから水や草や住みかを求めてティハーマへ向かった（§§938～39）。そして彼の下でアマレク人はメッカの下手 Ajyâd に住んだ（§945）ともある。また、Ya'qūbī（I,p.47）では、フーバルの子スマイダアは、ノアの子セムの子ルドの子アマレクの子孫である巨人たちのうち、最初の王となった人物で、ティハーマからシリアへ進み、イスラエル人を攻めようとしたが、ヨシュアが送った者に殺されたとある。Ṭabarī（I,p.756）にもアマレク人フーバルの子スマイダアの名は登場する。聖書では、ヨ

シュアが征服した王たちはヨルダン川の西側の31名で、ヘト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人とある（ヨシュア記12:7〜24）。

(95) ヨシュアの統治期間に関しては、聖書では彼が85歳でモーセの後を継ぎ（ヨシュア記14:10）、110歳の生涯であった（ヨシュア記24:29;士師記2:8）とあり、Ya'qūbī (I,p.48) や Ṭabarī (I,pp.515〜16) では27年間統治したとある。またヨシュアの系譜に関しては、Ibn Qutayba (pp.41,44) や Ṭabarī (I,p.506) に同じものが見られる。聖書では、ヨセフの子エフライム（創世記41:52）の子にヌンはいない（民数記26:35;歴代誌上7:20〜25）。しかし、ヌンがエフライム族の出身であることは間違いなく（民数記13:8）、ヌンがノンならば、エフライムの子孫である（歴代誌上7:27）。

(96) エイラトは申命記2:8、列王記上9:26、列王記下16:6にも登場するアカバ湾頭の町だが、現在のイスラエルの Elat の近く。

(97) アウフ・ブン・サアドは不明。

(98) "軍団（jaḥâfil）" が 'Abd al-Ḥamīd 版では "（ḥajâfil）［意味不明］"。

(99) バルカーは石灰岩の高原で、広義にはヨルダン川と死海の東、聖書のアンモンとモアブ、更にはギレアドの地にほぼ相当し、より狭義にはその中部で、アンマン（現ヨルダンの首都）を主都市とする地域である (J.Sourdel-Thomine, "Al-Balkā" ,*E I* ②,I,pp.997〜98)。Ṭabarī (I,p.508) によれば、この村の名は Bâli'ah。民数記22:5では、ユーフラテス川流域にあるアマウ人の町ペトルに住むベオルの子バラムとあり、Wahb に拠ると言う Ibn Qutayba (p.41) では、バラムはアブラハムによってロトの娘たちと結婚させられた者たちの子孫、Ya'qūbī (I,p.40) や Ṭabarī (I,p.508) では単にベオルの子とある。

(100) 民数記では、モーセの時代となっており、モアブ王バラクが彼に［モーセの率いる］イスラエル人を呪うよう頼む（20:6）と、かえって4回の託宣でイスラエル人を祝福する（民数記23:8〜10,20〜24;24:5〜9,17〜19)。しかし、ミディアンの女たち（モアブの娘たち）を唆し、イスラエル人にベオルのバアルを慕わせ、彼らを主に背かせる（31:16;25:1〜3)。その結果、24000名のイスラエル人が滅ぼされる（25:9)。バラム自身もイスラエル人に殺される（31:8)。

(101) Ya'qūbī (I,p.40) では、イスラエル軍に女性たちを差し向けて彼らをだめにすることをバラム（Bal'âm）はミディアン王に指示したので、モーセの復讐を受けて殺されたとある。しかしṬabarī (I,pp.508〜11) には、ある伝承に従い、以下のような話が記されている。モーセがカナンの地に達した時、バルカーの町々の一つ Bâli'ah にいたバラムは、イスラエル人を呪うよう彼の民に頼まれたが、アッラーが彼にイスラエルを祝福しかさせなかったので、彼の民に命じて、着飾った女性たちを物売りとしてイスラエル軍に送り込んだ。その一人カナン女性コズビ（Kusbî）とイスラエル人ジムリ（Zimrî）が交わったので、アッラーはイスラエル人に疫病を送り、下記（§94）のピネハスがこの両名を突き殺すまでに70000名のイスラエル人が滅んでしまった。"アマレク人王たちの一人" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "アマレク人の王たちの何名か"。

(102) "90000名" が、'Abd al-Ḥamīd 版では "70000名"。Ya'qūbī (I,p.48) には、ヨシュアがバルカーを征服した時、イスラエル人は女性たちと不義を繰り返し、彼の警告を無視したため、アッラーは疫病によって70000名を滅ぼしたともある。

(103) この文全体が、'Abd al-Ḥamīd 版では括弧扱い。引用部はクルアーン7:175。Ṭabarī (I,p.511) には同様な説明が詳述されている。

(104) 寿命はヨシュア記24:29と士師記2:8と同様である。しかし 'Abd al-Ḥamīd 版では、"110歳" が "120歳"。またṬabarī (I,p.515) では126歳とある。

(105) 創世記46:12や民数記26:20〜21ではユダの子ペレツの子はヘツロンとハムル。尤も、民数記34:19やヨシュア記14:6によれば、エフネの子カレブはユダ族ではある。Wahb に拠ると言う Ibn Qutayba (p.43) もカレブの系譜はマスウーディーと同様［但し、ペレツが Qâraḍ］で、カレブはモーセとアロンの姉ミリアム（Maryam）の夫とある。聖書では、ヨシュアがカレブにヘブロンを嗣業の土地（割り当て地）として与えたとあるだけ（ヨシュア記14:13,15:13）で、カレブがヨシュアの後継者とはなっていないが、Ṭabarī (I,p.535) には、カレブがヨシュアの後の指導者というのが定説だとある。それは次のクルアー

ンの引用部（5:23）に登場する二人がヨシュアとカレブとされることから来るのであろう。

(106) 引用部はクルアーン5:23。民数記14:30,14:38や、Ṭabarī（I,pp.498～99）参照。

(107) 別の写本というこちらは、聖書（士師記3:8）に符合する記述であり、Ya'qūbī（I,p.48）にも同様な記述［但し、クシャンがDūshân］が見られる。またṬabarī（I,p.545）には、別説としてロトの子孫クシャンの8年間が挙がっている。なお、'Abd al-Ḥamīd版では、"8年"が"80年"。

(108) オトニエルの血統と統治期間に関しては、士師記3:9～11やYa'qūbī（I,p.48）、そしてṬabarī（I,p.546）の別説と同様である。§95に登場するエフネの子オトニエルも参照。"……にいた巨人クーシュを殺した（qatala)"が、'Abd al-Ḥamīd版では"クーシュは巨人で、……にいたと言われた（qīla)"。クーシュは士師記3:10［戦いでクシャン・リシュアタイムはオトニエルの手に落ちた］に従えば、上記のクシャン・リシュアタイムではなかろうか。因に、Ya'qūbī（I,p.48）には、イスラエル人の不正・不遜がひどくなっていたので、アッラーはモアブの巨人クシャン［ここはDūshânでなく、Kūshân］に彼らを支配させたが、オトニエルが王位に就くと、クーシュを殺したとある。

(109) 聖書の記述（士師記4:2～3）やYa'qūbī（I,pp.48～49）、Ṭabarī（I,p.546）の別説から見て、これは§95に登場するカナン人ヤビン（Yâbîn）と思われ、先程は聖書と符合したこの写本が今度は、聖書の記述［ケナズの子オトニエルの後は、モアブの王エグロン、次はエフドとシャムガル、その後がカナンの王ヤビン］とは異なり、逆に§95が聖書に従った記述となる。この写本に見られる異同あるいは混乱は、オトニエルの死後も、エフドの死後も、イスラエル人が主の目に悪とされることを行なったと聖書にある（士師記3:12,4:1）ことから起こったものであろうか。

(110) アムラールはエリ（'Îlî）のことか。§96参照。Ṭabarī（I,p.551）も参照。ここも、"彼"がヤビン、"アムラール"がエリであるなしを問わず、聖書に沿った§§95～96とはかけ離れたものである。

(111) サムエル、サウル、ゴリアトはサムエル記7,11,17章などと、§§98～102参照。§1106では、ベルベル人の地は特にパレスティナの地であり、彼らの王はJālūtで、この名は彼らの王の称号であったが、ダビデに自分たちの王Jālûtを殺された後、王がいなくなり、彼らはマグリブ（al-Maghrib）の地に移ったという説を、§1167ではベルベルの系譜に関して、ハムの子カナンの子孫である説他を挙げている。

(112) Ṭabarīではカレブ（ヨシュアの後継者）の後でイスラエル人を治めたのはブジ（Būdhī）の子エゼキエル（Ḥizqîl）というのが通説（I,p.535）とかWahb説（I,p.539）とある。ピネハスは聖書では、モーセの目前で、バアルを慕った1名のイスラエル人とミディアン人の女を刺し殺した（民数記25:7）とか、［サムソンより後に］ベニヤミン族と彼らを除くイスラエル人とが戦った当時、主の御前に仕えていた（士師記20:28）とあり、Ṭabarī（I,pp.510～11）にもこの民数記の話が、先のバラムに関する記述の中に登場する。

(113) "〈第2の岩〉の上に"が、'Abd al-Ḥamīd版では"〈第2の岩〉の中に"。

(114) メソポタミアの王クシャンという表現は聖書のクシャンに相当し、§93のクシャン（Kūshân al-Kufrî）と同一人物に取れそうだ。

(115) オテニエルは、'Abd al-Ḥamīd版では、§93の'Amyâ'îlと異なる'Anyâ'îlと読み、オテニエルとは別人と考えているようだ。そして、マスウーディーも別人と考えているようだが、エフネの子カレブ（§93）の兄弟は、士師記1:13,3:9によれば、ケナズとなり、マスウーディーは混同しているようだ。結局、以下にエグロン、エフドの記事が続くので、この箇所もやはりオテニエルと考えてよかろう。期間は士師記3:11と同様。そして次のエグロンは士師記3:12やYa'qūbī（I,p.48:'Aqlûn）でもモアブの王［Ṭabarī,I,p.546では或る王］とあり、その期間18年も士師記3:14やṬabarī（I,p.546）と同様。Ya'qūbī（I,p.48）は15年。

(116) エフドは士師記3:15とṬabarī（I,p.546）ではベニヤミン支族のゲラ（Jîrâ）の子、Ya'qūbī（I,p.48）ではエフライム支族のゲラの子とあり、その期間も士師記（3:30）とṬabarī（I,p.546）では80年である［Ya'qūbīには記載なし］。マスウーディーはこの80年をエフドの55年と次のシャムガルの25年に分けている。またYa'qūbī（I,p.49）ではエフドの25年目が4000年目に当たるとある。

(117) シャムガルは士師記3:31,5:6とYa'qūbī（I,p.49［Samḥar］）ではアナト（'Ânât）の子とあり、期間

は示されていない。Ṭabarī（I,p.546）ではエフドの後は次のヤビン（Yāfīn）である。ヤビンは士師記4:2ではハツォルのカナン王とある。ヤビンの期間は士師記4:3や、Ya'qūbī（I,p.49）、Ṭabarī（I,p.546）と同様。'Abd al-Ḥamīd 版では“服従させた（qahara)”が“治めた（dabbara)”。

(118) 士師記4:4ではデボラはラピドトの妻とある。彼女の期間は士師記5:31と同様。またバラクは士師記4:6（ナフタリ支族のアビノアムの子）に準ずる。そして聖書では、デボラはヤビンの将軍シセラとの戦いをバラクに委ね、共に出陣した（士師記4:9）とあり、結婚という記述はない。尚、Ya'qūbī（I,p.49）では、デボラは登場せず、ヤビンの後、ナフタリ支族のアビノアム（Abīnu'm）の子バラク（Bāraq）が、またṬabarī（I,p.546）では、バラクがデボラのために、それぞれ40年間支配したとある。

［以下の注は次回に掲載する］

（1992. 5. 13 受理）